



HACK

12

アンテナ

KAI SHIGIHARA



12 アンテナ

「レスリー、レスリー、起きて」

覚醒を促され、レスリーはゆっくりと意識を取り戻した。

「ジュリアス？」

（そうだよ）

ゆっくりと頭を巡らせる。だが、周囲にジュリアスの姿はなかった。

（声だけ、君の側にいる）

そう、ジュリアスはもう死んでしまったのだ。

あれだけ強い力を持った人だったから、死んで幽霊になって、消滅しないのかもしれない。

「ジュリアス、ごめんなさい。謝っても許してもらえないってわかっているけど、本当にごめんなさい。こんなことになるなんて、私が悪かったの。私がちゃんとあなたに事情を話して、警告していれば」

（大丈夫だよ。ちゃんと弾は避けたから）

「……え？」

（いくら俺が人間相手には役立たずの能力者でも、殺気を向けられて気付かないほど鈍くはないよ。丁度その場にドミニクもいてね、振り返ちにしてくれたし。ケ빈は負傷してるだろう？どの程度？）

「え？」

（レスリー？ 大丈夫？）

あまり大丈夫ではないかもしれない。

「ジュリアス、あなた、生きてるの？」

（ケ빈に俺は死んだと聞かされたのかい？ 大丈夫、生きているよ）

「神様！」

思わず大きな声を上げてしまい、レスリーは今更無駄だけれど、両手で口を押さえた。ぎゅっと目を閉ざすと、涙が目じりから頬へこぼれていく。泣きすぎたせいで、それだけで色々なところがひりひり痛んだが、それすら嬉しかった。本当なら、大きな声を出して笑ってしまいたかった。

（喜んでもらえてるみたいでよかった）

「当り前よ」

ジュリアスがくすぐったそうに小さく笑っているような、そんな気配が伝わってきた。ジュリ

アスは大きな声を上げて笑うということは、あまりない。控えめに優しく、でもとっても魅力的に微笑む。そんな彼の笑顔が見たいと、レスリーは強く思った。

「近くに居るの？」

（ああ、いるよ。安心して）

驚きと喜びがおさまってくると、自分の置かれた危機的状況を思いだしていた。

ここは、レイノックス。ケビンに拉致され、監禁されている部屋の中だ。そして、さっきよりも体が軽かった。目もよく見えて、周囲を見回すと、部屋の中の様子が見て取れた。

白い壁の、広い部屋。部屋の真ん中には大きなベッドがあり、レスリーはそこに寝かされていた。大きなテレビに、立派なオーディオセット、バーカウンター。扉が三つあり、一つはクローゼットぽい。ないのは、窓だ。

（具合はどう？ ひどいことされていない？）

「ええ、大丈夫。薬をかがされて動けなかったんだけど、もう抜けたみたい」

そろそろと体を動かしてみる。ベッドに起き上がると、軽く貧血を感じたが、深呼吸を繰り返すと楽になってきた。足を動かし、ベッドから降りる。気になっていた三つの扉を確認した。

一つは、予想通りのクローゼット。レスリーのサイズの服が、大量に入っていた。もう一つは、バスルーム。立派な洗面台で顔を洗うと、さっぱりした。そして、もう一つは、開かなかった。ドアの横に、暗証番号入力用のキーパッドがある。これが外へとつながる扉だろう。

（動けそうかい？）

「ええ、なんとか」

自分の状態を確認。服は拉致されたときのままで、悪戯された形跡はない。ほっとした。ベッドサイドに、拉致されたときに持っていたバッグがあった。携帯がないだけで、他のものは全部入っていた。レスリーは常備してあるチョコレートの一つ口に入れ、いつも職場に持っているタンブラーから、朝いれたコーヒーを一口飲んだ。それだけで、自分でも驚くほど元気がでてきたように感じた。

「ここはどこ？」

（説明するよ。でもその前に、レスリー、言葉を口に出さずに伝えられるよね。そこにはきっと、監視カメラがあるから、派手な独り言はやめたほうがいい）

（……そうね、気をつける）

頭の中で会話するのは、レイノックスでの任務のときにかなり慣れた。コツをつかんでいる。（そこは、レイノックスの領土内にある、企業所有の小さな島だ。その島全部が企業の持ち物で、研究施設とそれに関係する建物だけがある。そして、その研究所の所長がケビンだ。そこにケビンはいる？）

（この部屋には居ないけど、一度目が覚めた時は、そばにいたわ。何かあって、何処かへ行ったけど。彼、車椅子に乗っていて、足を負傷してた。ふくらはぎあたり。……ジュリアス）

（なに？）

（ケビンのこと、知っているのね？）

（君の弁護士のカミラに会ったよ。それから、ドミニクがケビンを返り討ちにして、現場に彼の

血痕が残っていた。そのDNAからケビンの名前があがって、今ケビンは、俺の狙撃犯として指名手配されている。レイノックス警察も動いてくれていて、ケビンが席を外したのも、そのためかもしれないね)

ジュリアスは何でもないことのように言っているが、狙撃されたのだ。レスリーのせいで。

(君のせいじゃない)

(私はあなたにもっと早く事情を話して、警告すべきだったのよ)

(俺やドミニク、親父の見解は、君を恋人のふりをするだなんて任務でレイノックスに連れて行った軍が一番悪いってことになってるよ)

ジュリアスはわざと軽い調子でそう言ってくれている。

(それに、一番悪いのは、ケビンだからね。君は被害者なんだよ。忘れてない?)

それでも、ケビンの本性を見破れず、一度は恋人になった自分にだって非はある。

(もし、そんなものがあつたとしてもね、レスリー。今までに君が受けてきた苦しみで、十分におつりがくる)

(.....)

(責任あるから、ケビンと結婚するなんて言わないよね。俺と付き合うって約束しただろ?)

(ジュリアス)

(君の恋人として、一刻も早く君を救い出したいって思ってる。一番に駆け付ける権利が、俺にはあるって思ってる。君は、俺が助けに来るって待ってはいてくれなかったの?)

泣きすぎてひりひりしていた目じりが、また痛んでくる。涙はこぼしたくないと思っけていても、自然とあふれてきてしまう。

(待ってたわ。あなたに会いたいの、ジュリアス)

(俺もだ。愛しているよ)

(私も。私も、愛している、ジュリアス)

心と心で会話しているせいか、言葉だけではない何かで、ジュリアスの愛情と優しさと、そして嬉しさが伝わってきた。

それは、レスリーの胸を熱くし、体中を優しく包み込み、深い安心と愛情で包み込んでくれた。

ジュリアスの愛情は、レスリーが楽しく嬉しく微笑んでいること、健康でいること、誰にも縛られず自由でいること、レスリーがレスリーらしくいることを望んでくれていた。そして、レスリーを守るためならなんでもすると、そう強く思ってくれているのが伝わってきた。こんな状況だから特にかもしれないが、強く熱いジュリアスの庇護欲に、レスリーは深い安心を感じた。

(再会したら、まずキスだから)

(うん)

(まずは、そこから出よう。扉はあるね?)

(あるけど、ロックがかかっている。暗証番号を入力するキーパッドがついているの)

それに、この扉を開けたところで、脱出するのは簡単ではないだろう。

ケビンが天才だということは、身にしみてよく知っている。しかも、ここがケビンの研究所だ

というのなら、いたるところにケビンが作った仕掛けがあり、レスリーを見張っているはずだ。扉をあけられたとしても、開けた途端に警報が鳴り響いて警備員が飛んできそうな気がした。

（ジュリアス、どうやって脱出しようと思っているの？ 軍が突入してくるとか？）

（そこはレイノックスだから、うちの軍が突入することは出来ないんだ。レイノックスは、証拠が固まらないと動いてくれないけど、君がそこにいる証拠は、今のところない）

（まさか、潜入しているの？ 近くにいてって、そういうこと？）

軍の力ではないとすれば、ジュリアスの能力でこの研究所を制圧する以外に思いつかない。

だが、ジュリアスの力は、遠く離れたものにはうまく作用しない。ケビンのような天才が作ったシステムなら、きっとこの研究所の内部に入るぐらいしなければ、攻略は難しいのではないだろうか。

そうなると、ジュリアスが危険だ。攻略中も、無事に終わったあとも、ジュリアスは意識がない。そこを狙われたら、ジュリアスの命はあっという間に奪われてしまうだろう。

（ドミニクと一緒になの？ でも、彼は軍人だし）

流石に、意識のないジュリアスを守りながら戦うのに、ドミニク一人では心もとない。だからといって、大勢での侵入は、見つかりやすくなる。

（ジュリアス、無事なの？ 今、どこにいるの？）

（島の近くに停泊している船の中だよ。大丈夫。俺は安全だ）

（よかった。お願いだから、無理はしないで）

（ありがとう。今回は、ドニに担いで行ってもらうわけにもいかないから、別の手段を使う）

（別のって……）

（アンテナだ。君に、俺のアンテナになってほしい、レスリー）

あまり驚きはなかった。心のどこかで、そうかもしれないとずっと思っていたから。

ジュリアスとの絆を感じていたし、人間相手にはあまりきかないというジュリアスの力も、自分にはよくきいていたような気がしていたから。

それに、ジュリアスもレスリーがアンテナかどうかについて、アンテナではないというより、アンテナになってほしくないというニュアンスの発言が多かったから。

（どうして私をアンテナにしたくなかったの？）

今、アンテナにする理由はわかる。それしか、脱出の方法がないからだ。

レスリーは、ジュリアスがアンテナを欲しがってないと感じていた。軍や周囲がそれを望んでも、ジュリアスだけは拒否をしていた。

それなのに、今、レスリーがアンテナになれることを証明してしまったら、ジュリアスの望まない事態になるかもしれない。アンテナがいることで、ジュリアスに何らかの負担を与えるのなら、それしか助かる道はなくても嫌だった。

（……今、話さないと駄目かな）

（長くならないわ。二年前、何があったの？）

（今、話す必要は）

（聞かせて、ジュリアス）

ジュリアスの迷いが、レスリーには強く伝わってきた。迷いと、恐怖だろうか。

(怖いのか？ ジュリアス)

(.....ああ、正直ね。二年前、俺のパートナーは任務中に亡くなったんだ)

(あなたと心がつながっている時に？)

(そうだよ。俺は一度死んだことがあるようなものなんだ)

今、レスリーにもジュリアスの恐怖と戸惑いが強く伝わってきている。それを克服しようという彼の意思も同時に感じるが、恐怖ほど手に負えないものはない。レスリーもよく知っている。

(その時のことを思い出すんでしょう？ やめておきましょう)

(俺は君を救い出したいんだ。いいかい、レスリー。よく聞いて)

やめようと言ったのは、逆効果だったようだ。ジュリアスは恐怖をねじ伏せようと思いの力を強めた。

(君は俺の力を中継することが出来る。そのためには、常に俺の方へと意識を向けていなければならない。俺を信じ、俺の力を常に感じていてくれ)

(わかった)

(簡単だと思った？ でも、君の前にケビンが現れた時、君はケビンへの恐怖を押し込めて、俺に心を添わせられるかな。ケビンが君を捕まえようと手を伸ばした時も、俺を信じていられる？

俺から意識が反れた時、アンテナの力も弱くなる。俺の力はうまく伝わらなくなる)

(そのせいで、前のパートナーは亡くなったのか？)

(.....そうだ。彼は窮地に陥り、パニック状態になった。俺の力は伝わりにくくなり、彼は俺の力を信じられなくなり、アンテナでいられなくなったんだ。俺は君を救い出したい。そのために、俺を信じてくれ)

彼ということは、男性だった。そしてきっと、情報関係の仕事をするために特殊訓練を受けた人物だったのだろう。そんな人でも、追い詰められればパニックになり、ジュリアスを信じられなくなった。それなのに、素人の自分でやれるのかという疑問が浮き上がってくるのをとめられなかった。

だが、ジュリアスを信じることなら、きっと以前のパートナーよりうまく出来るはず。ジュリアスを感じることで、こうやって心で会話していると、彼の心の内に抱き込まれているような気分になる。優しくて甘やかで温かで、この中にずっといることが難しいわけない。ジュリアスがそばにいてくれれば、ケビンが来てもパニックになんてならない。

(あなたはケビンに勝てる？ 彼、狂気のカリスマだよ)

(勝てるさ。今まで俺に征服出来なかったシステムはない。ただ、少し時間はかかるかもだ)

(わかった。あなたを信じるわ、ジュリアス)

そして、自分を信じよう。ジュリアスの愛してくれている自分を。.....きっと大丈夫。